



鹿児島県立甲南高等学校

# 進路指導室だより

平成28年度 第12号 (3月18日発行)

## ～「書く」ということ～

「〇〇があった。楽しかった」。学習の記録でよく目にする感想である。基本的に「学習の記録の感想は、自由に書いていいよ」と生徒には言っているし、朝の短い時間で記入するので仕方のない部分もあるのだろうが、やはりこのような感想では、読む方には気持ちがなかなか伝わらない。(もちろんしっかりした文章で感想を書く生徒もいます)。でも、自分の高校時代を振り返っても似たような感想しか書けなかったような気がする。そもそも私が高校生の時(1980年代後半)は、学習の記録などというものはなく、国語の記述問題以外で文章を書く機会はほとんどなかったように思う。当時、入試に小論文を課す大学はまだ少なく、小論文も書いた記憶がない。今の甲南生のように課題設定の仕方を教わり、実際に課題研究に取り組んだという経験など当然ない。教科の勉強さえしていれば良かった。理系だったこともあり、当時はそんな状態でも大学進学にあたっては、大きな問題は感じていなかった。ところが、大学では理系学部であってもレポートや論文など文章を書く機会が予想以上に多く、その都度書き上げるのに大変苦労した。教員になってからも思うように文章が書けず、簡単な文書を1つ作成するのに多くの時間を費やした。つくづく思った。「学生の頃に文章力を身につけておけば良かった…」と。



インターネットの普及を始めとする情報化社会の進展に伴い、文章を書く機会は以前に比べて格段に増えた。電子メールや、ホームページ、ブログなど文章によるコミュニケーションが、最も早く、強力な手段となっている。さらに学生であれば、志望理由書や就活のエントリーシート、小論文、研究論文、レポートなどを、社会人になれば、企画書、報告書、依頼文、勧誘文、ブログといった様々な種類の文章を書く(書かされる)機会がある。我々が文章を書く機会は、この先増えることはあっても減ることはないだろう。10年前の社会人はツイッターもフェイスブックも使っていなかった。今後どんな変化が起こって、どれだけ書く機会が増えるかなんて、とても想像することはできない。

文章力を向上させるには「とにかく書いて慣れる」、「たくさんの本を読む」、「名文を書き写す」などいろいろな方法が提唱されているが、一番の近道は「なぜ」、「どうして」ということを考えて文章にすることであろう。「なぜそう思ったのか」「どうしてそう考えるのか」という「理由」や「原因」を書くことが、自分の思いや考えを分かりやすく伝えるためには必要である。冒頭の感想でいうと、「なぜ楽しかったのか」「どういったところが楽しかったのか」「今までの経験と比べて何が違うのか」というようなことを少し考えて書くだけでずいぶん変わってくるはずだ。「書くことは考えること」と言われる。書く力(習慣)を身につけることはそのまま考える力(習慣)を身につけることにつながる。「書く」というアウトプットの作業は、思考のメソッドであり、自分の思考を深めて自己成長を促す行為でもある。

文章力を身につけるために、新たなことをする必要はないし、忙しい甲南生にはそんな時間もないだろう。しかし、日々の学習の記録を書くことはできる。「なぜ」、「どうして」を考えて書いてみてほしい。続けていけば、学習の記録は「書く力」や「考える力」を向上させるための最強のツールになるはずである。